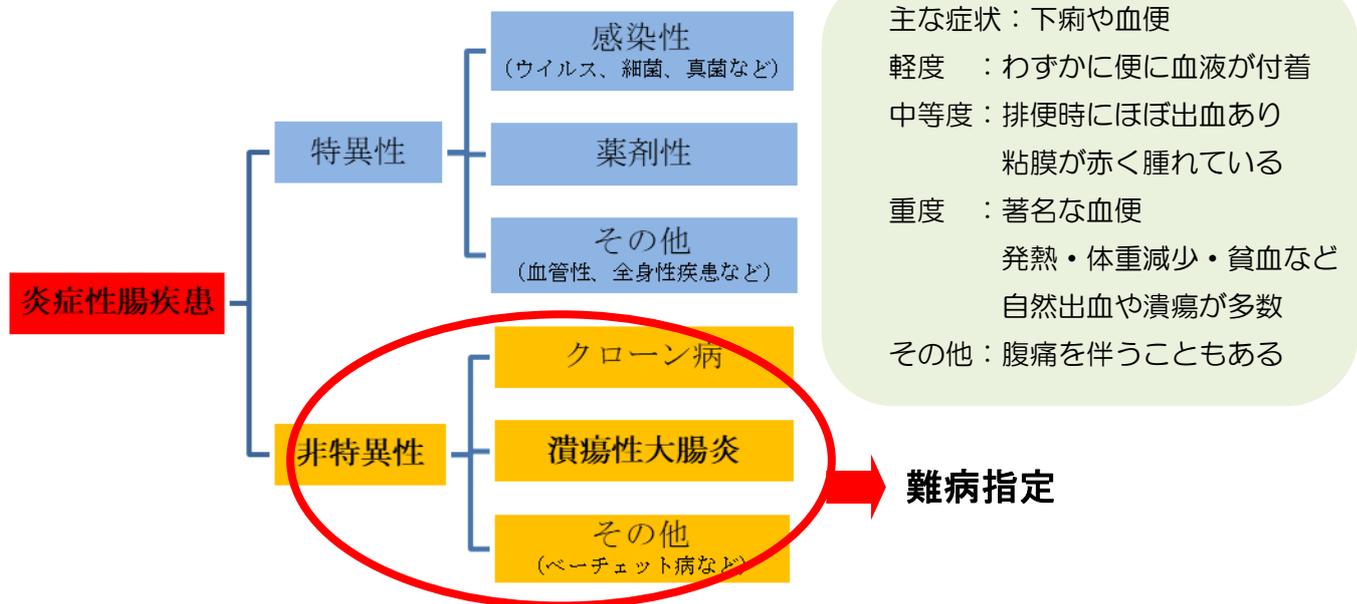


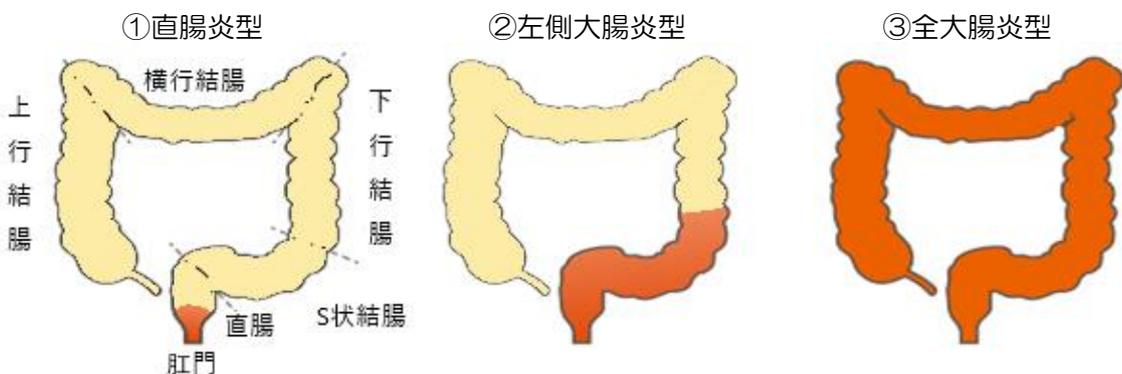
潰瘍性大腸炎

潰瘍性大腸炎は炎症性腸疾患のひとつで、大腸の粘膜に炎症が起きることによりびらんや潰瘍ができる原因不明の慢性の病気です。炎症性腸疾患とは、ヒトの免疫機構が異常をきたし、自分の免疫細胞が腸の細胞を攻撃してしまう事で腸に炎症を起こす病気です。



診断：内視鏡検査やX線造影検査、病理組織検査などを行う。

発生部位：基本的には直腸から始まり、連続的に上へと広がっていく。



予後：寛解（症状が落ち着いている状態）と再燃（症状が悪化している状態）を繰り返しながら慢性の経過をたどる。発病後長期経過（10年以上の全大腸炎型）すると大腸がんを発症するリスクが高まる。

治療目標：潰瘍性大腸炎は原因が不明であるため、大腸の炎症を抑えて症状を鎮め寛解に導くこと、そして炎症のない状態を維持することが治療の主な目標となる。

治療方法：①内科的（薬物）治療：炎症抑制薬が基本薬となり、炎症が強い場合はステロイドが用いられる。（免疫調整薬、抗体製剤などを用いることもある。）

②外科的治療：多くの場合は内科的治療で症状が改善するが、内科的治療では十分な効果が得られない重症例や合併症（穿孔、大出血、中毒性巨大結腸症、癌化など）には手術が適応となる。

③血球成分吸着除去療法：腕の静脈から血液を取り出し、炎症に関わる血液成分を吸着させて取り除き、再度血液を体内に戻す治療法。

2019年度に当機関で大腸がん検診を受診され精密検査判定となった方の内、30代～60代の約0.47%の人が精密検査結果で潰瘍性大腸炎の診断を受けています。潰瘍性大腸炎は難病に指定されていますが、適切な治療をして症状を抑えることができれば健康な人とほぼ変わらない日常生活を送ることが可能です。精密検査判定が出た場合は、精密検査を受けるようにしましょう。